

# 伝統はいかにして創られるか

## - 折尾神楽をひろめた男性のライフヒストリー研究 -

緒方 淳子

北九州大学文学部人間関係学科

### 要 旨

伝統とはなんだろうか。折尾神楽は、鳥根県出身である野村砂男氏が発起人となった折尾神楽保存会が28年前に始めたもので、現在では折尾の郷土芸能としてすっかり定着している。この論文では、折尾神楽という郷土芸能を通じて、新しい文化がどのような形で定着し、浸透していったかを述べる。

折尾神楽が誕生した要因として、野村氏というひとりの人間のパーソナリティによるところが大きい。野村氏は幼い頃に養子として出され、複雑な環境の中ではやい時期に自立することを求められながら育った。こうした経験が彼を非常に積極的で行動的な人間に育て、他人に率先して新しいことをおこなう性格を形成していったと考えられる。また再会した実の父親が神楽師であったことももちろん無視することはできない。

また、保存会が結成された当初においては、神社に結成を報告して回ったりしたが、やがて口コミやイベント会社からの紹介などでさまざまな神社から要請を受けるようになっていった。外部から人が集まってできた折尾という町にとって、こうした地元の芸能が求められていたことも注目すべき点である。こうした状況のもとで野村氏は、すでに全国に名をはせていた石見神楽を、折尾神楽という新しい名前をあたえて作り直していった。このように元の神楽をそのまま演じるのではなく、北九州の気質にあうように工夫をし、その地方独自の神楽として広めた点も重要である。

折尾神楽はこうした様々な要因が重なりながら、郷土の芸能として、年を重ねるごとに折尾の町に根づいていったのである。

### 目 次

はじめに

第一章 伝統について

第一節 伝統の所見

第二節 創られた伝統芸能

第二章 折尾

第三章 神楽について

第一節 神楽の概要

第二節 折尾神楽とそのルーツである石見神楽について

第四章 野村砂男氏のライフヒストリー

第一節 野村氏の生い立ち

第二節 折尾神楽保存会の軌跡

第五章 折尾神楽保存会の現在

第六章 折尾神楽の実際

考察

はじめに

1998年の7月、北九州の折尾で全国神楽まつりが開催され、私はそれを見る機会に恵まれた。この全国神楽まつりには、津見山神楽、

高千穂神楽、石見神楽、折尾神楽が集結した。

この中の折尾神楽については以前から耳にしたことがあったが、実際に見るのは、初めてであった。私はこの折尾神楽の迫力に感動し、同時

に自分の身近にこのような素晴らしい郷土芸能があることを知り驚いた。

折尾神楽は、島根県出身である野村砂男氏が発起人となった折尾神楽保存会が28年前に始めたもので、現在では折尾の郷土芸能としてすっかり定着している。むろん伝統芸能というにはあまりに歴史が浅いという批判があるかもしれない。しかし最近の研究によれば、伝統が長い時間経過をえたものであるという考え方は、必ずしも正しくないことが明らかにされている。伝統もまた創られるのである。この研究の主題である折尾神楽は、まさに伝統が生まれる現場の格好の事例であるといえる。

以下の論攷では、折尾神楽が島根県出身の野村氏の手によってどのように創られ、社会に受け入れられていったのか、その理由を折尾の町の風土とや野村氏のライフヒストリーなどの面をあわせて分析していきたい。

## 第一章 伝統について

### 第一節 伝統の所見

折尾神楽について語る前に、まず伝統とは何かという問題について先行研究をとりあげなら、最初に考えてみたい。

エリック・ボブスボウムの「創られた伝統」によれば、「『伝統』とは長い年月を経たものと思われ、そう一般に言われているものであるが、その実、往々にしてごく最近成立したり、きた時には捏造されたりしたものもある（エリック・ボブスボウム1992）」とある。このエリックの言葉のように「伝統」という言葉はが使われる時には無意識のうちに、「遠い昔から受け継がれてきたもの」と思われているが、実際には「伝統」とされているものの中にも、ごく最近に創り出されたものが数多くあるようだ。

現代の日本でいわれる伝統芸能の中にも、人々が昔からその土地（郷土）で生まれ、それが何世代にも渡って行われているものだけではなく、新しく他の地方からもってきてその土地に根づいたものも多く見られる。

### 第二節 創られた伝統芸能

もともとある地方のものであった祭りを、別の町がとりいれ地元の伝統芸能として根づかせた例をふたつ紹介する。

東京で、1957年（昭和33）にはじまった高円寺の阿波おどりが、その有名な一例である。松平の論文によれば、この祭りはすでに40回近くを数え、毎年八月末には100万を超える見物人が集まり、60のグループ（連）が踊る。本来この催しは、高円寺の商店街のひとつ、駅南口のパル商店街が、その青年部結成の記念にはじめた「ばかおどり」に端を発している。その意味で、阿波おどりは、元来地元商店街に結びついたものであり、神田や赤坂の天下祭、浅草の三社祭のような長い歴史をもつものではない。いわば、はるか遠い四国の阿波に育った祭りの形式を借りて、これを現代の都市祭りにとりこみ、1つのかたちをつくりあげていったものといえる。現代の都市文化のかたちをあれこれ探した揚句、当時の高円寺の人たちにいちばん似合うものを、日本の祭りの形式のなかから自由につかみだしたのである。（1994、松平誠）

他の地方の芸能が別の土地に定着したもう一つの例として、歴史は古くなるが、九州に身近な例として約270年前から続いている伝統芸能の木屋瀬盆踊を紹介する。

木屋瀬盆踊の踊手は道中姿を連想させる手甲、脚絆に、女は妻折笠をかぶり、男は三度笠と、

腰には提灯を下げる。囃は太鼓と三味線である。踊りの種類は並手、次郎左、本手の三種があり、次郎左は単調な振りをくりかえすだけだが音律がやさしい、本手は変化に富みながらもやや悠長な踊りである。並手の中の男の踊りは、「おてんき、ひめじょ、さんばそう、うしろ、みざお、とあみ、やじろべえ」とテンポの速い7つの変化がある。

この踊りはもともと八代将軍吉宗の享保年間（1716～1736）木屋瀬宿の町の人がお伊勢参りの土産にと習ってきた伊勢音頭に、大名行列の供奴の仕草や掛け声を取り入れて個性ある郷土芸能として発達してきたといわれている。この盆踊は、遠賀川対岸の植木の町に伝わる三申踊と同系統のものであるが、きわめて洗練されていて優雅な風格のあること、その扮装がまことに特異なことが特色である。

この論文でこれから述べていく折尾神楽も以上二つの祭りの例と同様に、ごく最近に折尾の町の伝統芸能として定着した神楽である。本稿では以下折尾神楽の事例を中心に、新しい文化がどのように導入され、定着し、人々に受け入れられていくかを、伝統の創造のプロセスの事例として考察をすすめたい。

## 第二章 折尾

はじめに、折尾神楽がどのような町で生まれていったのか、折尾の町の概要とその変遷を追ってみることにする。

折尾は福岡県北九州市八幡西区にある。八幡東区と八幡西区は1963年以前には八幡市という一つの市であり、折尾はJRの駅を中心に黒崎・八幡とともに八幡市の商業や交通拠点の一角を担っていた。

北九州市が発行した「折尾まちづくり構想策

定調査報告書」によれば、折尾の町は明治以前から続く、遠賀川と洞海湾を結ぶ堀川の開発により形成されていったという。その開発は元和7年（1621）から始まり、完成したのは文化3年（1804）と多大の年数を要している。江戸時代には藩の御用米、材木、農産物の運搬と治水に大きな役割を果たしている。明治23年（1890）に鹿児島本線、明治24年（1891）に筑豊本線と相次いで鉄道が開通し、人や物質（特に石炭）の集散の場となった。昭和初期～終戦の時代においては、遠賀川右岸丘陵地を中心に多くの炭鉱がみられ、石炭輸送のために、各炭鉱を結ぶように鹿児島本線（博多方面）と筑豊本線（若松方面）を結ぶ分岐路が新設された。そして昭和19年に八幡市と合併した。そのご炭鉱周辺では炭鉱住宅の開発が盛んに行われた。しかし昭和40年代に入ると、炭鉱が閉山し、周辺丘陵地に置ける土地区画整理事業を中心とする住宅地開発が進行した。また炭鉱用鉄道が次々と廃止され、その一部は道路として再整備された。昭和50年代以降は、折尾地区周辺部での住宅開発が活発に行われ、これにあわせて幹線道路の整備が進んだ。人口の推移については、1965年から1985年にかけて大きく増加したが、1985年以降やや人口増加がやや停滞傾向にある。（北九州市1994）

このように折尾の町は、川と鉄道による石炭業の輸送の基地として形づくられ、エネルギー政策の変換にともない都市近郊の宅地として変貌していった。そのために、住民も外部から移り住んだ人々が多く、長年にわたって継承されている郷土芸能や文化などが希薄だったといえる。新しい土地への定着がすすむにつれ、住民同士の連帯感をふかめ、自分の土地の文化とし

て誇れる郷土芸能を、人々が求めていったことは想像に難くない。こうした土地がらで折尾神楽は、まさに期待された芸能として登場するのである。

### 第三章 神楽について

#### 第一節 神楽の概要

そもそも神楽とはどのような芸能であろうか。ここでは大日本百科事典の記述をもとに神楽の歴史と概要についてまとめる。

神楽とは、神慮を慰めるために神前に奏舞する神事芸能であり、元来は神を対象としておこなうものではなく、祭りのときに来臨する神が人間のためにおこなう呪術的な鎮魂舞踊であった。神楽の起源を説く物語として名高いものに、天岩戸の前で舞った天鈿女命の神話がある。天照大神の出現を願って天鈿女命は真折を髪とし蘿をたすきにつけ、小竹葉を手草に結び、宇気伏せて踏みとどろかし舞った。これは大地にひそむ靈魂を誘発する方法と考えられ、毎年新嘗祭の前日（11月寅の日）に天鈿女命の子孫の猿女がおこなった鎮魂舞踊の本縁を語る神話であるとみられる。神楽の語源については古来諸説があるが、その中では「かむくら（神座）」の約音とする説が穩当と考えられる。「かむくら」とは、その中に神体を入れて持ち歩く移動式の神座であるといい、また神楽における採物は神の降臨する神座、すなわち「かむくら」であり、その名称が楽舞全体の名称になったとも説かれている。

神楽は大別すると、宮廷におこなわれる「御神楽」と、民間におこなわれる「里神楽」の二種類に別れる。宮中でおこなわれる御神楽には、「清暑堂御神楽」と「内侍所御神楽」の二種類がある。清暑堂御神楽は大嘗祭（卯の日から午

の日まで四日間祭儀がおこなわれる）巳の日に豊樂殿での節会の終わったあと、その後方にある清暑堂という御殿でおこなわれる。別名「清暑堂神宴」ともよばれ、終夜琴をひき神歌をうたって繰り広げられる神聖な宴会の形を土台としている。これにあとから八幡系統を中心にして、種々の古い鎮魂舞踊の要素が流入し加わって形成されたと考えられる。その成立年代は明らかではないが、ほぼ貞観年間（859～877）と推定され、天皇の御一代に一度だけ催されるものである。

これに対して内侍所の御神楽は、毎年十二月恒例行事として内侍所においておこなわれるもので、清暑堂御神楽の基礎の上に、芸能の内容次第を整え、一条天皇（在位986～1012）の御代に成立をみたものといわれる。その芸能次第は、人長が神楽人を伴って神楽場に参入、名のりがあり、笛・ひちりき・琴・歌などのおのおのの試楽をおこない、呪術的な阿知女作法が演じられ、ついで楽器の伴奏で神楽歌をうたう。人長が採物（柵・幣・杖・篠・弓・劍・鉾・杓・葛）を手にして採物舞を舞い、韓神・倭舞が続き、時には猿楽がおこなわれる。御神楽は本来冬の神事芸としておこなわれたが、一方夏越の祓に伴うものとして夏神楽がおこり、民間の神楽の信仰は、これに発すると考えられる。

民間の神楽については、里神楽・太々神楽・岩戸神楽・神代神楽などの一般的呼称のほかに、地方による種々の名称がある。その系統も多岐にわかれ、その成立に大きな影響を与えている先行芸能も多い。田楽・能楽のほかに、雅楽・延年舞・幸若舞、さらには近世の歌舞伎などとも相互に影響しあって地方の神楽は成り立っているとみえる。神楽は祭りにおこなわれる神事芸能のもっとも代表的なものだが、その信仰

も地方により一様ではない。それらの中で主体をなすものは、すでに平安期の夏神楽にみられ、中世以降発展をとげた祓の信仰にあったと考えられる。伊勢神宮の信仰の発達とともにその下級役人たちが代参の形で各地におこなった祓の信仰が、芸能的变化を遂げ、「代神楽」と称されるにいたった。これは獅子頭を信仰の主体とし、さらに演劇的要素を加えて、いっそうの展開をみ、各地に神楽として定着したと考えられる。伊勢・尾張に根拠をもつ太神楽のほか江戸の丸一太神楽もその垂流であり、東北地方には山伏神楽・番楽・ひやま・権限舞など「獅子神楽」とよばれる系統がある。さらに、襖の変形である湯立行事を中心とする神楽が伊勢神宮の御師の家でおこなわれ、この系統は中部山岳地帯に霜月神楽、花祭、遠山祭などと呼ばれて展開し、また秋田県の保呂羽山付近にも分布している。山陰・山陽各地の神楽は、剣舞・清目などの七座神事を前段とし、後段に神能とよぶ12段の能風の曲目が演じられる。この出雲系統の神楽は、九州の高千穂神楽その他の神楽にも影響を及ぼし、関東地方の鷲宮神楽、江戸神楽などもこの流れをくむものといわれる。このほか奈良の春日大社、東京の日枝神社その他各神社に伝来する巫女舞を中心とする巫女神楽の系統があげられる（1980 大日本百科事典）。

以上のように民間の神楽の神事芸能として現存する形態は、1.巫女神楽、2.出雲神楽、3.伊勢神楽、4.獅子神楽、5.その他の舞楽・田楽など奉納舞に分けられる。この論文であつかう折尾神楽は中国地方の石見神楽のながれをくむ民間の神楽である。

第二節 折尾神楽のルーツである石見神楽について

石見神楽は元来、五穀豊饒に感謝する意をこめて、毎年の秋祭りで氏神様に奉納されてきたものである。「島根のまつりと伝統芸能」によれば、石見には開拓神である大元神を祭る田楽系の大元神楽があり、これが石見神楽の原型とされている。平安末期から行われていた素朴な田楽が神事神楽と融合して大元神楽が生まれ、さらに謡曲を神能化した出雲の佐陀神能の影響をうけて演劇化を起し、室町時代に完成した。その後、石見神楽には3つの転機が訪れ、現在のような形になった。

旧藩時代は神職が神楽を舞い奉納していたのだが、明治時代の初期に神職から一般庶民に移った（神俗交替）。そして、明治15年国学者の藤井宗雄を中心に行われた改正が第2の転機である。このとき元来の比較的リズムの遅い六調子神楽に改良が加えられ、現在主流になっている比較的节奏の速い八調子神楽が生まれた。さらに1970年に大阪で開催された万国博への参加で、ショーとしての神楽が繰り広げられるようになった。

石見神楽の演目は30余りあり、その内容のほとんどは古事記・日本書紀をもとに脚色されたものである。なかでもヤマタノオロチを題材にした「大蛇」はその中心的な演題である。神楽は全国各地にあるが、その中でも石見神楽はリズムの軽快さ、衣装の豪華さなど他に例を見ない独特のものである。現在、石見一帯には100余りの神楽社中があり、秋祭りを初めとする各神社の例祭や、石見地方のあらゆる行事、イベント、更には、結婚式などの神事では必ずと言っていいほど神楽が舞われており、この神楽は島根県指定無形民俗文化財となっている。

石見神楽の流れをくむ折尾神楽は、昭和45年（1970年）に折尾神楽保存会が始めたも

のであり、その歴史は比較的新しい。この折尾神楽は島根県出身である野村砂男氏が始めたものであり、あとでも触れるように、石見神楽を北九州の気質に合うように、さらにテンポよくアレンジしている。

#### 第四章 野村砂男氏のライフヒストリー

##### 第一節 野村氏の生い立ち

現在の折尾神楽保存会が存在する背景には野村氏の生い立ちが深く関与していると思われる。野村氏は、昭和14年(1939年)8月30日、島根県益田市下種町で、四人兄弟の三男として生まれた。しかし野村氏が2、3才の頃、父親が兵隊にとられ、母親は女手一つで四人の子供を育てるのは大変なので、ちょうど親の顔を忘れてしまう、手のかからない年齢ということで、北九州の折尾に住んでいる子供がいない伯父夫婦のところへ養子として預けられた。野村氏は伯父夫婦を実の父親、母親だと思って育った。その生活の中で野村氏はつらい思いをしたこともあったようである。

第二次世界大戦が激化し、沖縄が完全降伏が伝えられたころ、伯父夫婦は、次は北九州の番であろうと予測した。「自分たちは空襲で死んでもいいけれども、自分たちの子供やけれども預かった子やから、人様の生んだ子供を死なせちゃいかん」ということで、野村氏は一旦、島根県の実家へ送り届けられた。

戦時中という時代でもあり食糧不足、動乱、全ての人が冷静でいられない時期、幼い子供はどう感じていたのだろうか。島根に届けられる途中、下関で空襲にあった。その時のことを氏はこう語っている。「今やったら、島根に4時間ぐらいでつくけれども、途中下関で空襲にあいましてね、たどりつくのに、二日ぐらいかかっ

た気がします。下関の空襲では、駅がやられたり、機関士の人の首がなくなっとったのも見だし、それから駅にとまっとたらちょうど敵がきたので、駅の地下道に入るのに、私たち、女、子供、そしてお母さん、実は義理の母ですけども、汽車の窓から飛び降りるのにやっぱ一弱いものが一番最後ですよ。それから、ああいう空襲の時、人は普通想像つかん動きになるんですよ、飛行機がきてパーっとやり出したら、普通はおはようございますというような人でも、もう気違いですよ。一つの異常事態ですよ。」

そして、島根へ着くと、間もなく終戦となった。その後、折尾の伯父、伯母が迎えにきたが、実の母だと思っている伯母よりも、島根のおばちゃん(実の母)の方が優しく、また折尾では、食糧がなく、ひもじい思いをしていたのに対し、島根の方では、米などの食料が豊かだったので、野村氏は帰らないと言って折尾には拒んだ。それから2、3度ちがう人をたてて迎えがきたが、野村氏は帰らないと抵抗し、とうとう折尾の伯父、伯母は連れ戻すことをあきらめた。

昭和21年に実の父が戦争から帰ってきた。そして小学校三年生の時に、実の母から「あんたはおばちゃん、おじちゃんち、言いようけれども、この前兵隊姿で帰ってきた人がお父さんで、私がお母さんなんよ」とはじめて告げられた。実の父親は石見神楽の神楽師であり、野村氏は父親を通して神楽に出会い、このあとずっと神楽を見て育つことになる。この新しい家庭環境は野村氏にとってすでに生活の一部となり、神楽への関心を芽生えさせたものと思われる。こうした一連の巡り合わせについて野村氏は「それがあったけ、折尾に神楽があるんです」と語っている。

このころ村では、子供が神楽を舞うことが一

般的に許されない風潮となっていたが、野村氏は、神楽を舞ってみたい気持ちが強く、中学二年生の時に友人三人に「村の収穫祭で神楽を舞ってみたいか」と話をもちかけた。そして三人は「野村、そりゃーもしろいことやね、やってみようか」と意気投合した。しかし父親や近くの村人たちは、子供が神楽を舞うことに反対だったので、父親に直接神楽を教わることができず、父親が青年だったころ神楽を教わった師匠の所へ、学校の帰りに隠れて通ったという。天性の才能があったのだろう、舞の腕はめきめき上達し、同時に野村氏は石見神楽に魅せられていくのである。

そしていよいよ、村の収穫祭で舞うことになった。子供に禁止されている神楽を人前で舞うことに内心の不安はあった。父親は許してくれるだろうか。ところが、彼らの神楽をみた村人たちは怒るどころか拍手喝采であった。実の息子の晴れ姿をみた父親も実際は複雑な心境であったろうが、すでに神楽を舞うことをある程度は許す気持ちになっていただろう。野村氏にとってこの体験は、今に続く神楽師人生の原点として忘れられない出来事であったという。

14才の中学生が神楽を舞ったという、いまだかつてない出来事は、大きな評判となった。そして、野村氏の育ての親である伯父がたまたまそれを伝え聞き、お正月に養老院へ神楽で慰問したいと、父親と野村氏を折尾に呼び寄せた。

1953年12月30日、野村氏の父親と野村氏は折尾で、二日間にわたり伯父に神楽を教え、明るる正月に五ヶ所ほどの養老院を慰問した。その際、野村氏は伯父から「中学を卒業したら、自分の建材店で働いてくれないか」という申し出をうけた。それに対して野村氏は、自分の育ての親としてずっと面倒見てくれた伯父

に対する恩返しの気持ちで、中学校卒業後、折尾の町にもどることにした。

伯父は昼間は責任をもって仕事を教えるから、夜は、神楽を教えてくれないかと野村氏に頼んだ。そこで、事業所内に神楽クラブが結成されたのである。その後、二番目の兄も、島根県から折尾へ来て同じ建材店で働くようになり、神楽クラブで共に活動を始めた。当時の職人の世界では、四年修業して、その後一年間、御礼奉公で五年で巣立っていくのが一般的であった。しかし、野村氏は伯父に対する恩から十五年間建材店で働いたという。

野村氏は独立するために、昭和43年(1968年)4月から一年間、九州経理専門学校で学び、さらに建築士の資格を取るために、昭和44年から二年間、YMCAの建築科で学んだ。神楽にかぎらず自分が目指したものは必ずやり遂げようとする、野村氏の積極的なパーソナリティがこうしたところにもかいま見られる。十五年間、建材店で働いた後、昭和45年5月1日に独立し、友進建設を設立した。それと同時に、折尾神楽保存会を野村氏を初めとする七人で結成した。

当時としては珍しいことではなかったかもしれないが、野村氏は幼くして養子に出され、15才にして社会へ出て、人並以上の苦勞をしている。これは、折尾神楽の代表者としての野村氏の人間性を高める上で、大きく作用しただろう。また野村氏は、折尾神楽保存会の傍ら、折尾西自治町内会長、折尾西公民館館長、折尾警察署少年補導員もしている。何事にも積極的で、責任感が強く、ひとびとのあつい信頼を受けている、野村氏の人格はこれまで述べてきたような、さまざまな経験の上に形作られてきたものなのである。

## 第二節 折尾神楽保存会の軌跡

折尾神楽保存会は、昭和45年5月1日に野村砂男氏が発起人となり結成された。結成にあたっては、数々の苦労があった。まず予算がなかったため、メンバー一人一人が少しずつ毎月資金を出しあい、その当方で30万円集めることができたのだが、神楽の衣装、道具は高額なため、三演目ぐらいは舞えるよう、島根県の衣装店に頼み込んで用意してもらった。その時、その衣装店の奥さんから「保存会をつくるのは簡単だけれど続かせるのは難しいよ」と言われ、その言葉が本人にとって胸に焼きつき、何が何でも続けていこうと固く決心したという。また、大太鼓は高額だったので、購入することができず、神社の宮司さんに頼み、神殿で神事が終わった後、特別に借りたこともあった。

発足してまもなく、折尾神楽保存会の当初のメンバーには初心者も含まれていたため、野村氏はメンバーと共に故郷の島根県へ生の神楽を見に行った。このとき野村氏がメンバーに「どうね、神楽する気になったね」と聞くと、メンバーは「素晴らしいね、あの神楽やったら北九州っ子にあうばい」と答えたという。しかし、石見神楽は一晚中舞うため、二時間程度の上演時間しか許されない北九州地方の神楽にむかないところもある。またテンポのおそい所や同じような所作の繰り返しも多い。もちろん、石見神楽は重要な伝統芸能であるからその基本は曲げることにはできないが、テンポの遅いところは速くし、また同じような所作は極力省いて、北九州の気質に合うように改変した。このようにして、石見神楽の流れをくむ新しい折尾神楽が完成したのである。「石見神楽を北九州に根づかせるためにはこうしたアレンジが不可欠だっ

た」と野村氏は語っている。

また、地元住民の有力者の中には、折尾神楽は他の地方から持ってきたからと、郷土芸能とは認められないと言った人がいた。しかし先にあげた木屋瀬宿場踊の例を出し、「たとえよその土地からきたものでも郷土芸能として定着することはある」と、折尾神楽を応援してくれる多くの人々に支えられた。

さて、野村氏は、折尾神楽保存会を結成する時に、どのような心がけをしていたのだろうか。野村氏は「保存会を作って、また和気あいあいと長く続かすためには、あまり縦の流れをです、組織を打ち出してはいけな」と考え、それに努めた気がします」と言う。保存会の中では、まず、メンバーが平等であるということをお大切にされた。さらに、「苦難な道になってもくじけたり、途中で解散したりしないで、そしてまたみなさんが目を見張るものを作ろうという意志は強かったと思います」と語っており、観客を意識した、高い志をもって始めたことがわかる。

そして折尾神楽保存会結成後、折尾神楽保存会結成を報告するという形で、保存会メンバー三人で北九州一円の神社を一日かけてまわった。昭和45年9月16日に結成して初めて、芦屋町の岡湊神社で奉納した。この年奉納したのは、全部で八ヶ所であった。

奉納する神社が、年ごとに徐々に増えていったが、その理由としては、神社を司る、宮司たちの間で、折尾神楽保存会のことが、口こみで広がってゆき、その結果、数多くの神社から奉納を要請されることになったことが大きい。また、神社によっては、イベント会社から、折尾神楽保存会と紹介され、奉納を要請するようになった場合もある。そして1998年現在、北九州各地の神社で毎年60ヶ所も奉納されるほ



ど、この地域に定着している。折尾神楽が奉納されている主な神社としては、中山神社(山口) 恒見八幡神社(門司) 風師神社(門司) 甲宗八幡神社(門司) 篠崎八幡神社(小倉) 葛原八幡神社(小倉) 天疫神社(小倉) 大清水神社(小倉) 貫八幡神社(小倉) 荘八幡神社(小倉) 大根地神社(嘉穂) 多賀神社(直方) 八所神社(水巻) 岡湊神社(芦屋) 月瀬八幡神社(中間) 日吉神社(若松) 宮地嶽神社(宗像) 宗像大社(宗像) 筥崎宮(福岡)などが挙げられる。

しかし、順調に、折尾神楽保存会が定着していったわけではない。発足当時は、折尾神楽保存会のメンバーが若かったため、神社につき神楽を舞う用意をしていると、総代さんから、「若い衆が荷物を持ってこられたけど、神楽舞う人はいつおいでなさいますか」と言われ、それに対して「私たちが荷物を降ろしたら、すぐ準備して舞い始めます」と言ったところ、「何言いよんね、あんたたち若い者が神楽をするわけなからう」と小馬鹿にされるようなことが多々あった。一般的な、神楽保存会では若い人が何人かいても大半を占めるのが60代70代の年配の方で、折尾神楽保存会のように20代ばかりの神楽保存会が珍しかったからであろう。しかし、神楽を見終えた時には「先程着た時には誰が神楽を舞うのかなと失礼なことを申し上げました」、「参りました」などと言われ、着々と折尾神楽保存会の実力は認められていった。

そして、折尾神楽保存会が軌道に乗り始めた昭和54年の夏、折尾の町に誇れる新しい祭りとして、折尾の鷹見公園での夏越祭りが始まった。とくに今年一九九八年は、夏越祭20周年、北九州市制35周年ということで、記念事業として全国神楽まつりが開催された。今や折尾

神楽はこうした町のイベントには欠かすことのできない芸能である。保存会の活動の場は、もちろん神社がもっとも多いが、その他、結婚式、同窓総会、各種イベントに広がっている。

## 第五章 折尾神楽保存会の現在

折尾神楽保存会は、どのように成り立っているのだろうか。まず構成メンバーについては、発足当時は、七名であったが、現在では二十名と増加している。もちろん、単純に七名から二十名と増加していったわけではなく、途中で転勤になった人や若くして亡くなった方もいたという。メンバーは10才から59才までと幅広い年齢層にわたっている。ここで、中心になって活動している10名ほどのプロフィールを紹介しよう。

・氏名 年齢 職業  
安立玲児 10才 小学生  
参加した動機 叔父の勧めがきっかけで参加することになった。

野村政徳 17才 高校生  
父親が神楽をやっていたので興味がわき参加することになった。

吉川和行 26才 建築板金  
物心ついた時から、折尾神楽を見て育ち、小太鼓や笛の音などが体に染み込んでいて、何かひかれるものがあり参加することになった。

安立浩二 33才 自営業・臨時郵便局員  
家系が祭り好きであり、そしてメンバーが友達で手伝いで何回かきているうちに、いつの間にか参加するようになった。

磯部保浩 37才 会社員  
祭りが好きで、折尾神楽があることを知って参加した。

岩前精郎 45才 運送会社  
野村氏とは消防団時代の仲間に参加することになった。

山本行雄 48才 左官業  
兄が島根で石見神楽をしており、神楽は身近なものだったので、折尾神楽に参加するようになった。

岩村清光 49才 畳屋  
消防団時代の仲間、野村氏の親友となりそれから参加した。

野村守直 49才 建材店  
野村氏が独立し、折尾神楽保存会を発足する前の事業所内の神楽クラブで一緒であったので参加することになった。

柳井武雄 50才 インテリア(内装工事)  
島根県出身で石見神楽を見て育った。就職する時、北九州へきて、折尾神楽があることを知って参加した。

吉川国張 55才 建築板金  
折尾神楽保存会発足前からの友人であり、石見神楽がどういうものかを野村氏に誘われて、神楽を見に島根までゆき、神楽を見てほれこみ参加することになった。

渡辺勇 55才

野村氏が独立し、折尾神楽保存会を発足する前の事業所内の神楽クラブで一緒であり、親友であったから参加するようになった。

このように、野村氏の知人、友人を中心に、神楽や祭りに興味のあるさまざまな年齢や職業の幅広い人々が集まっている。また、後継者問題に関して、少しでも多くの後継者が育つようにと、平成5年4月から則松小学校の神楽クラブへ、週に一度指導に行っている。人数は現在五人程度と少ないが、将来、折尾神楽クラブ保存会の中心的メンバーになってくれることを期待している。通常、新しく折尾神楽保存会に参加する場合は、参加する一年ほど前から、奉納する神社について回り、それから参加するという形式をとっている。メンバーは今現在、男性ばかりであるが、とくに制限をしているわけではなく、たまたま今まで参加したいと要望した人がいなかったのだという。

全員あつまっての練習は、一人一人が忙しいので定期的にはおこなっていない。しかし、新しい演目をマスターするために、集合して練習をする場合もある。

## 第六章 折尾神楽の実際

それでは、折尾神楽保存会は一体どのように活動しているのか、10月9日の水巻町猪熊の鷹見神社の例をもとに時間を追って説明する。

夕方6時、野村氏の経営する建設会社の工場をそれぞれ何人かに別れて出発する。6時半、神社に到着。野村氏は、神事に参加し、それ以外の保存会のメンバーは、トラックから、手際よく、神楽で使う衣装や道具を降ろし、神楽の準備をする。

神楽がおこなわれる場所は、図1に参照して

ほしい。アの場所で、演奏がおこなわれる。イの場所では、神楽が舞われる。ウの場所で靴を脱いだ観客が座り、神楽を観る。

7時に神楽の舞がスタートする。普通一回の神楽では三～四演目が舞われる。各演目ごとに舞う人は交代するが、日によっては、一人が二演目を舞うという重複する場合もある。この日は、塩抜、恵比須・大黒、大蛇の三つの演目が舞われた。今現在、折尾神楽保存会が舞うことのできる演目は十三演目である。中でも大蛇(おろち)は、どこの神社に行っても、かならず舞う演目であり、石見神楽の影響を受けた折尾神楽として、欠くことのできない重要な演目だといえる。大蛇のストーリーはヤマタノオロチの伝説に基づく大蛇退治である。大蛇の舞の迫力に人々は圧倒され、大蛇が一匹ずつ退治されるごとに人々は盛り上がる。

神楽が全部終了すると、神社の御供え物(もち、お菓子、鯛など)を観客に向かってまき、観客はそれらの縁起物を拾う。それが終了する神社で直会をし、直会がない場合は、その日参加したメンバーで食事に行く。こうした食事の場では、その日あった出来事などの話をする。そして、食事が終わると、解散。それぞれが自分たちの乗ってきた車で帰ってゆく。演じている時間は、約二時間ぐらいであり、お初穂として、謝礼金を神社側からもらう。

## 考察

この論文では、折尾神楽という郷土芸能を通じて、新しい文化がどのような形で定着し、浸透していったかを述べてきた。

折尾神楽保存会のメンバーは野村氏に魅きつけられた人々が集まって構成されていた。私自身、特に野村氏というひとりの人間のパーソナ

リティが非常に大きな要因であるという印象をもった。たとえば、折尾神楽を奉納している神社の神主さんに保存会について、どう思っているかたずねたことがある。そのとき神主さんが言うには、「野村氏は、非常に郷土愛が強い。折尾神楽保存会が広まった要因としては、野村氏の努力の成果が大きい」と非常に野村氏を評価していた。

ライフヒストリーの章で見てきたように、野村氏は幼い頃に、養子として出され複雑な環境の中で、はやい時期に自立することを求められた。こうした経験が彼を非常に積極的で行動的な人間に育て、他人に率先して新しいことをおこなう性格を形成していったと考えられる。また再会した実の父親が神楽師であったことももちろん無視することはできない。すこしうがった見方かもしれないが、神楽とは少年時代の野村氏にとって、幼い頃に失われた実父との絆を再構築していく作業だったのかもしれない。

また、保存会が結成された当初においては、神社に結成を報告して回ったりしたが、やがて口コミやイベント会社からの紹介などでさまざまに神社から要請を受けるようになっていった。折尾の鷹見公園での夏越祭りの例のように、折尾という新しく人が集まってきた町にとって、潜在的にこうした芸能が求められていたことも、定着の理由として注目すべき点である。こうした状況のもとで野村氏は、すでに全国に名をはせていた石見神楽を、折尾神楽という新しい名前をあたえて作り直していった。このように元の神楽をそのまま演じるのではなく、北九州の気質にあうように工夫をし、その地方独自の神楽として広めた点も重要である。

折尾神楽はこうした様々な要因が重なりながら、郷土の芸能として、年を重ねるごとに折尾

の町に根づいていったのである。

#### 謝辞

わたしが折尾神楽に出会い、本論文を書き上げるにあたり、いろいろな方にお世話になりました。

折尾神楽保存会会長の野村砂男氏は、建設業をいとなみ、また自治会の役員などをされているお忙しい中、お話を聞かせていただいたり、なんども神楽に同行させていただきなど、貴重な時間をさいてくださりありがとうございました。保存会のみなさまにもご協力いただき、重ねてお礼申し上げます。

野村氏に接していく中で目標に向かってやり遂げようとする信念と情熱、そして人間的な暖かさに深い感銘を受けました。

また北九州大学文学部の重信幸彦先生には、参考文献を紹介していただき、北九州市役所、八幡西区役所の方々には、資料を提供していただきました。

最後に、本論文を仕上げるにあたり暖かい助言、ご指導をしてくださった竹川大介先生にあ

つくお礼を申し上げます。

#### <参考文献>

エリック・ボズボウム、テレンス・レンジャー（訳）前川啓治 梶原景昭 1992 伝統は作り出される 作られた伝統 P19 紀伊國屋書店

松平誠 1994 現代ニッポン祭り考 P98~109 株式会社小学館

相賀徹夫 1980 大日本百科事典ジャポニカー5巻 P111~112 株式会社小学館

北九州市 1994 折尾まちづくり構想策定調査報告書 P3~4

島根県観光連盟発刊 島根の祭りと伝統芸能 <http://www.web-sanin.co.jp/orig/festi/festi205.htm>